

## 「法難を経て生きるお念仏」

松井 将司

今から約 800 年前のこの 2 月に「承元の法難」といわれる事件が起こりました。

法然上人を中心として集まった吉水教団が既存仏教教団より弾圧され、後鳥羽上皇によって専修念仏の停止（ちょうじ）と、門弟 4 人の死罪、法然上人、親鸞聖人ら中心的な門弟 7 人が僧籍を剥奪され流罪とされました。

「念仏に生きる」者が国によって解散させられ死罪や流罪にされたのです。それは当時「念仏に生きる」ことがとても難しいことだったと教えてくれます。

今、私たちは「お念仏」をどう受け止めているのでしょうか？その教えを正しく受け止めているのでしょうか？

親鸞聖人は流罪に遭われてから「愚禿親鸞」と名乗られ、「非僧非俗」の暮らしをされました。それは僧ではなく、また俗人ではなく仏道を歩む者として、私たちと同じ目線で人間とは何か、苦しみとは何か、救いとは何かを「お念仏」を通して伝えて頂いたのです。

私たちが今こうして頂いている教えが、幾多の苦難を経て、大切に大切に現代に引き継がれているということを思わずにはられません。

安穏な日々のなかに、お念仏の教えを頂いて生きてはいるが、先人の苦悩を思えば、本当に稀有な中に、この教えを頂いていることがわかります。

改めて、お念仏の大切さを感じて頂き、皆様にとって「お念仏」とは何かと考えて頂く発端になればありがたいです。